平成16年度　8020公募研究報告書抄録

報告書名：地域住民中高年者の口腔所見に喫煙が及ぼす影響　8020達成の阻害因子としての喫煙

研究者名：安藤富士子[1)]、角保徳[2)]、下方浩史[1)]

所　　属：[1)] 国立長寿医療センター疫学研究部、[2)] 国立長寿医療センター病院先端医療部口腔機能再建科

目的

本研究では地域在住中高年者約2300人を対象に喫煙と口腔の状態（保有歯数、歯周組織の状態、舌苔付着状況、咬合、唾液）との関連を検討することを目的とした。

方法

国立長寿医療センターにおける第3回「老化に関する長期縦断疫学調査（地域在住中の男性1175名、女性1142名、平均年齢59.9±11.8歳を対象）」および一部第4回調査の結果を用いた。歯科調査は歯科医師が保有歯数、歯周組織(WHOのCPI部分診査法)および舌苔の量(Miyazakiらの方法)、咬合力（デンタルプレスケール、オクルーザーFPD-707)、唾液量（唾液浸潤度検査紙エルサリボ）を評価した。喫煙歴に関しては事前に配布した質問票で調査し、対象者を喫煙経験なし・喫煙をやめた・喫煙している、の3群に分類した。口腔の状態と喫煙との関連を年齢を考慮して性別に検討した。

結果および考察

保有歯数は男女ともに年齢と共に減少した。また保有歯数は喫煙経験なし(男性24.1本、女性22.8本)、喫煙をやめた(男性22.8本、女性20.9本)、喫煙している(男性20.6本、女性20.6本)の順に男女とも有意に減少した(年齢を調整した一般線形モデルでのトレンド検定 男性$p<0.0001$，女性$p<0.01$)。歯周組織は男女とも年齢が高い群ではより悪い状態の者が多かった。また男女とも喫煙している者ほど歯周組織の状態が悪かった。舌苔についても高齢な者ほど舌苔付着面積が大きい者が多く、男女とも喫煙している者ほど舌苔の量が多かった(年齢を調整したCochran-Mantel-Haenszel 検定 男性$p<0.001$，女性$p<0.01$)。咬合力は男女とも年代が高い群ほど顕著に低下していた。喫煙歴と咬合力との関連を検討したところ男女ともに年齢を調整した一般線形モデルのトレンド検定で傾向（男性$p=0.09$、女性$p=0.08$）が認められ、喫煙により咬合力は低下する傾向があると考えられた。歯数を考慮に入れると男性では咬合力と喫煙との関連は消失したが女性では歯数と独立して喫煙歴と咬合力との間には関連が認められた（年齢・歯数を調整した一般線形解析のトレンド検定で$p=0.06$)。唾液量については年齢、喫煙歴との関係は男女とも有意ではなかった。

結論

歯数、歯周組織の状態、舌苔、咬合力には男女ともに加齢の影響が認められた。年齢を調整した解析の結果、喫煙はこれらの口腔保健指標に悪影響を及ぼしていた。禁煙が口腔保健の状態を改善する可能性が示唆された。